

【論 文】

鳥根県出雲市平田方言におけるとりたて否定形

野間純平

(鳥根大学法文学部)

摘 要

本稿では、鳥根県出雲市平田方言における「とりたて否定形」について記述する。「とりたて否定形」とは、「～しはしない」に由来するとされる動詞否定形式であり、平田方言では kak-jaseN のような形をとる。本稿では、このとりたて否定形の形式と意味について、以下のことを明らかにした。

- (a) 平田方言のとりたて否定形の形態には複数の種類がある。これらは、「～しはせん」に相当する迂言的な形式 V=wa se-N からの変化の過程に位置づけて整理することができる。すなわち、(ア) 縮約と仮定形への平準化を経た形式 (mir-(j)aseN)、(イ) /ra/ の隠在を経た形式 (miRseN)、(ウ) -seN として再分析された形式 (mi-seN) の 3 種類である。(4 節)
- (b) 平叙文におけるとりたて否定形の意味は、先行研究で指摘されているような「相手の肯定的な見込みに対する否認」に制限されることはなく、単純否定形とほぼ同じ意味で使用することができる。(5 節)
- (c) 疑問文で用いられるとりたて否定形は、話し手の推定を表す「のではないか」とおおむね同じ用法を持つが、非過去かつ肯定の場合に限られる。(6 節)

キーワード：出雲方言、否定、とりたて否定形、文法化、ノデハナイカ

1. はじめに

鳥根県東部の出雲地区で話される言語(以下「出雲方言」とする)では、動詞の否定形として、由来の異なる 2 種類の形がある。以下の例は、どちらも「行く」の否定形である。

- (1) オラ 行カンズィ
- (2) 行キヤーシェン (以上、廣戸 1950:62)

(1) の「行カン」は「行かぬ」に由来し、西日本諸方言で広く用いられるのと同じ形である。一方、(2) の「行キヤーシェン」は「行きはしない」に由来するとされる形である。後者の語形は「とりたて否定形」と呼ばれ、西日本方言を中心に研究が進められてきた。

本稿は、出雲市平田地区で行った調査にもとづいて、平田方言のとりたて否定形の形態を整

理し、その意味について記述することを目的とする。具体的には、以下の構成で進める。まず2節では、先行研究を概観し、本稿の目的を明らかにする。3節では、本稿で用いるデータと調査方法について簡単に述べる。4節では、平田方言のとりたて否定形の形態を整理し、5節では、平叙文におけるとりたて否定形が表す意味について記述する。6節では、疑問文でとりたて否定形が用いられた際に、話し手の推定を表すことを記述する。最後の7節は本稿のまとめである。

2. 先行研究と問題のありか

本節では、先行研究を概観し、本稿が問題とするところを明らかにする。まず2.1節において、とりたて否定形に関する先行研究を引用しつつ、本稿における記述の対象となる「とりたて否定形」について説明する。続く2.2節では、出雲方言におけるとりたて否定形の先行研究を概観し、本稿の目的を明らかにする。

2.1. とりたて否定形とは

本稿で用いる「とりたて否定形」という用語は、本稿冒頭の(2)のような形式を指すものとする。すなわち、「しはしない」に相当する形が由来と考えられ、通常否定形(動詞に否定の接辞が後接したもの)と形態的に対立する形式を指すものとする。たとえば、冒頭の(2)の「行キヤーシェン」は「行きはしない」に由来すると考えられるが、「行きはしない」よりも縮約・一語化が進み、(1)の「行カン」と対立する動詞の一形態と考えられる。本稿が主な対象とし、「とりたて否定形」と呼ぶのは、このような「もうひとつの否定形」である。これに対して、(1)のような「通常の」否定形を指して、本稿では「単純否定形」と呼ぶことにする。

複数の否定形については、愛媛県宇和島方言の「セン形」と「スラヘン形」(工藤1992)や、愛知県尾張北部方言の「ン」と「セン」(丹羽2002)など、いくつか詳細な記述がある。これらの先行研究では、「とりたて否定形」という用語は使っていないものの、「スラヘン形」(宇和島方言)や「セン」(尾張北部方言)といったとりたて否定形(以下、直接引用の場合を除いて、先行研究についても「単純否定形」「とりたて否定形」という用語で統一する)が特別な意味を持っていることが指摘されている。たとえば、次の(3)のように、宇和島方言のとりたて否定形は、聞き手の肯定的判断に対する〈否認〉を表すという。

(3) アンタ 先生 職員室ニ オル ユータケンド オラヘンデ。

(あなたは先生が職員室にいたと言ったが、いないよ)

(工藤 2014:409)

(3)では単純否定形「オラン」ではなく、とりたて否定形「オラヘン」が用いられているが、これは、「先生が職員室にいる」という聞き手の判断を〈否認〉するためと説明される。

竹内(2013)は、これらの先行研究を踏まえて、岡山方言のとりたて否定形「(り)ヤーせん」について記述したうえで、「(り)ヤーせん」を「とりたて否定形の単純否定化」という言語変

化の中に位置づけた。竹内によると、岡山方言の「(り)ャーせん」は、「しはしない」に由来するものの、形のうえでは一語化が進んでいる一方で、意味のうえでは単純否定形と同じではないという。一方、関西方言のとりたて否定形式「ヘン」は、単純否定形と同じ意味で用いられることから、岡山方言の「(り)ャーせん」は、とりたて否定形が関西方言のように単純否定化する過程にあると指摘している。このような言語変化の過程は日高(2007)において指摘されたもので、竹内(2013)は、岡山方言をその過程の中に位置づけた研究といえる。

以上、諸方言におけるとりたて否定形の先行研究を概観し、問題とされていることを整理した。諸方言のとりたて否定形については、特に意味のうえで単純否定形とどのように異なるかという点に注目して記述されてきた。そして、そのように記述されたとりたて否定形を、「とりたて否定形の単純否定化」という変化の中に位置づけることも行われている。

2.2. 出雲方言のとりたて否定形

次に、本稿の対象となる出雲方言のとりたて否定形に関して、これまでに指摘されてきたことをまとめる。

本稿の冒頭に引用した用例からわかるように、出雲方言のみならず、山陰方言において動詞の形態に異なる2種類のもが存在することは、廣戸(1949, 1950)の段階で既に指摘されている。特に、形式の地域差に注目して詳細に記述されている。廣戸(1950)の記述をもとに、「行く」を例としてとりたて否定形の形態のバリエーションをまとめると以下ようになる。地域名はその形が使用されている地域として代表的に挙げられているものである。

- (a) 行キャセン：出雲北部に多く、南部では「行チャーセン」
- (b) 行カヘン：出雲北部に多く、南部では「行カーセン」
- (c) 行ケセン：能義郡西北部、八束郡東部
- (d) 行キシエン：隠岐島前(知夫里を除く)

近年の研究では、小西(2011)が、言語地図のデータを用いて、出雲方言内部においてラ行五段化の進行度に地域差があることを指摘している。その中で、とりたて否定形もまたラ行五段化した形式をとる地域があることが述べられている。さらに、小西(2017)では、対象を中国方言に広げ、「仮定形ととりたて否定形の平準化」と、ラ行五段化との関わりについて考察している。

一方、出雲方言におけるとりたて否定形の意味についても、先行研究にいくらか指摘がある。廣戸(1949)では、上記のような語形が「しはしない」に由来するとしながらも、その意味について以下のように指摘している。

一体日常の言葉にあつては、右の例のカキャセンを吾々が分析して、始めて「書きはしない」が出てくるのであつて、使用者はカカンもカカセンもカキャセンも共に「書かない」と同一のものとして表現しているのである。決してカカンは書かないの意で、カキャセン

は「書きはしない」から出たものであるとは感じて居らない。

(廣戸 1949:26)

すなわち、話者の直感では、とりたて否定形と単純否定形とで、意味の違いは特にないということである。同様の記述は、他の先行研究にもある。たとえば、出雲市平田方言(本稿の対象と同じ)の活用体系を記述した平子・友定(2018)には、以下のような記述がある。

上の否定形(引用者注:単純否定形のこと)とは別に、「カキャセン／カカセン」など形の上では「とりたて否定」にあたる形式がある。特に事柄の成立について強く否定する際に頻繁に見られるが、一般の否定形と交替可能な場合もある。

(平子・友定 2018:82)

とりたて否定形が単純否定形と同じ意味とは言わないまでも、とりたて否定形が単に「しはしない」の意味にはとどまらないことが示唆されている。

以上のように、出雲方言のとりたて否定形の表す意味が必ずしも「しはしない」と対応するわけではないことが先行研究において指摘されているが、具体的な検証は行われていない。そこで、本稿では、2.1節で取り上げたとりたて否定形に関する先行研究の記述をもとに、出雲方言の中でも平田地区の方言を対象として、とりたて否定形の詳細な記述を行う。

3. 調査概要

本稿で記述の対象とするのは、島根県出雲市平田地区(2005年合併前の旧平田市域を指す)で話されている言語(以下「平田方言」と呼ぶ)である。島根県の方言は、以下の図1に示すように、東部の出雲方言、西部の石見方言、隠岐諸島の隠岐方言の3つに大きく区画される。平田方言はそのうち出雲方言の中でも北部に位置する。



図1 島根県方言区画図(平子・友定 2018:77より)

本稿で用いるデータは、平田において行った面接調査により得たものである。調査協力者は、1938年平田生まれの男性で、石見地区における数年の外住歴を除いて、現在まで平田で生活している。以下、本稿で提示する例文は、先行研究の引用の場合を除いて上記の調査で得たものである。例文の提示法には、下地(2020)の「標準3段方式」を採用する。3段で1つの例文を構成しており、1段目は表層の音素形を、できる限り形態素に分けて表したものを記し、2段目はそれに付したグロス、3段目は標準語訳である。グロスの略号については、末尾の「略号一覧」を参照されたい。

4. とりたて否定形の形態

平田方言の動詞における単純否定形およびとりたて否定形の形態を、次の表1に示す⁽¹⁾。以下で述べる動詞の分類や単純否定形に関する記述は、基本的に野間・友定(2022)にもとづいている。なお、表1に記したとりたて否定形はすべて /seN/ を含む形であるが、同じ話者の回答において、この /seN/ は /heN/ という形でも現れる。この /seN/ と /heN/ は地域や年齢などによるバリエーションであり、文法的・意味的な違いはないとひとまず考え、本稿では /seN/ で代表させる。「?」を付した語形は、使用の可否について話者の判断にゆれがある形式である。

表1 平田方言の動詞否定形(非過去)

動詞		「書く」	「降る」	「見る」	
語幹		kak-	hur-	mir-	mi-
単純否定形		kak-aN	hur-aN	mir-aN	mi-N
とりたて 否定形	(ア)	kak-jaseN kak-aseN	hur-jaseN hur-aseN	mir-jaseN mir-aseN	
	(イ)		huRseN	miRseN	
	(ウ)				mi-seN
動詞		「来る」		「する」	
語幹		子音語幹		子音語幹	母音語幹
単純否定形		kor-aN	ko-N	s-aN	se-N
とりたて 否定形	(ア)	kor-jaseN, kur-jaseN kor-aseN, ?kur-aseN		s-jaseN s-aseN	
	(イ)	kuRseN			
	(ウ)		ko-seN		se-seN

平田方言の動詞は、語幹の形によって子音語幹動詞と母音語幹動詞に分類することができ、ku-「来る」とsu-「する」は不規則変化動詞として位置づけられる。表1には、子音語幹動詞としてkak-「書く」とhur-「降る」の2つを掲げたが、これは、語幹末子音が /r/ のものとそれ以外とで、とりたて否定形の語形に一部違いがあるためである。「見る」は母音語幹動詞だが、平田方言では、いわゆる「ラ行五段化(r語幹化)」が起こっており⁽²⁾、「見る」には母音語幹のmi-と子音語幹のmir-の2種類がある。そのため、単純否定形も母音語幹型のmi-N

と子音語幹型の mir-aN の 2 種類が存在する。「来る」と「する」についても、子音語幹と母音語幹の両方が併存しており、否定形にはどちらの形も存在する。

以上を踏まえて、平田方言のとりたて否定形の形態について記述する。表 1 には、とりたて否定形として複数の語形が示されているが、これらの諸形式は、「しはせん」に当たる迂言的な表現 V=wa se-N からの変化の過程の中に、それぞれ違った段階として位置づけられる。そのような観点で形式を分類したのが表 1 の (ア) (イ) (ウ) であり、それぞれ以下のようにまとめられる。

- (ア) 縮約および仮定形との平準化を経た -(j) aseN
- (イ) /ra/ の隠在を経た RseN < r-aseN
- (ウ) 再分析された -seN

これらの形式は、si=wa seN からの変化の過程に、以下の図 2 のように位置づけられる。なお、この過程は、共時的な記述をもとに推定したものであり、通時的なデータにもとづいたものではない。

		(ア)		(イ)		(ウ)	
		平準化		隠在		再分析	
書く	kakiwaseN	>	kakjaseN	kakaseN			
降る	huriwaseN	>	hurjaseN	huraseN	>	huRseN	
見る	miwaseN	>	mirjaseN	miraseN	>	miRseN	> miseN
来る	kiwaseN	>	kurjaseN	kuraseN	>	kuRseN	> koseN
			korjaseN	koraseN			
する	siwaseN	>	sjaseN	saseN			> seseN

図 2 平田方言におけるとりたて否定形の成立過程

図 2 には、表 1 に掲げた 5 つの動詞について、左端に迂言的な形式を記し、そこから様々なプロセスを経て (ア) (イ) (ウ) の各形式が成立する過程を示している。以下、それぞれに分けて記述する。

4. 1. (ア) 縮約および仮定形との平準化を経た -(j) aseN

このグループの語形は、共時的には子音語幹に -jaseN または -aseN が接続した形と記述できる。このうち子音語幹動詞(「書く」「降る」)および「する」の語形は、「しはせん」が縮約したものと考えられる。すなわち、「書く」を例にとると、kak-i=wa seN > kakjaseN という変化は十分想定できる。kak-aseN は、そこからさらに直音化した形式である。この kakja および kaka という形式は、仮定形と同形である。

一方、母音語幹動詞の mir-jaseN や「来る」の kur-jaseN については、小西 (2017) が以下の (4) の比例式を用いて指摘するように、仮定形を基準としてとりたて否定形をラ行五段化さ

せた形式と考えられる。

- (4) kakja (R) : okirja (R) =kakja (R) -seN : X
 X=okirja (R) -seN (< okja (R) -seN) (小西 2017:165)

上記の kak(j)aseN と同様に考えるなら、母音語幹動詞の mi-「見る」のとりたて否定形は、mi=wa se-N > mjaRseN のように縮約すると考えられる。実際、『方言文法全国地図』（国立国語研究所編1999、以下 GAJ）161図「見はしない」では、「ミヤーセン」および「ミヤーセン」の形が、出雲南部および石見地区において回答されている。しかし、平田を含む出雲北部では、「ミリヤセン」「ミラセン」といった語形が回答されている。これは、上記の(4)のように、子音語幹動詞に倣って、母音語幹動詞のとりたて否定形を仮定形と同形に揃えたためと考えられる。

なお、「来る」のとりたて否定形のうち、(ア)に含まれる形式は、kur-jaseN と kor-jaseN のように、語幹が /u/ 系統のものと、/o/ 系統のものがある。「来る」の仮定形は kurja および kura であるため、仮定形に平準化したとりたて否定形は、/u/ 系統の語形のみである。/o/ 系統の語形は、ki=wa se-N からの縮約とも考えにくいことから、語幹のゆれとして考える。単純否定形の ko-N および kor-aN の語幹が /o/ 系統であるため、その形に揃えたのではないだろうか。

4. 2. /ra/ の隠在を経た RseN < r-aseN

次に、表1の(イ)の語形に注目する。この語形を持つのは、語幹末に /r/ を持つ動詞、すなわち表1だと hur-「降る」、mir-「見る」、kur-「来る」の3種である。これらの語形は、語幹末の /r/ に -aseN が接続したことによってできた音列 /ra/ が「隠在」(室山1964)したものと考えられる。「隠在」とは、出雲方言および西伯耆方言において起こる現象で、ラ行音節、特に /ri/ と /ru/ が語頭以外の環境に現れた際に脱落し、直前の母音が長音化するという現象である。たとえば、「あります」/arimasu/ は /aRmasu/ に、「春」/haru/ は /haR/ に交替する。

ただし、(イ)の形式が成立するにあたって、/ra/ の隠在が起こったと考えるには、問題がある。室山(1964)や藤木(1959)によると、/ra/ の隠在は、直前の母音が /a/ の場合に限られるが、表1の huRseN や miRseN はこの条件に当てはまっていないためである。たとえば huraseN の場合、/ra/ の直前が /a/ ではなく /u/ であり、先の条件に反している。間(2006)でも本稿と同様に、「(イ)の語形を /ra/ の隠在の結果と考えており、藤木(1959)の指摘も引用しつつ、「表(引用者注：隠在が起こる音節と前接母音の関係をまとめた藤木1959の表のこと)以外の組み合わせでも、r音の脱落が起こると考えられる」(p.17)と述べている。しかし、これでは /ra/ の隠在が起こる条件に対する説明が十分ではない。たとえば、表1にも示した mir-「見る」の単純否定形 mir-aN には /ra/ という音列が存在するが、これが隠在して *miRN となることはない。このことから、(イ)の語形の形成において、直前が /a/ 以外の環境においても /ra/ が隠在するのがなぜかを説明する必要がある。

この問題に対して、本稿では以下のように考える。すなわち、とりたて否定形の形成において、/ra/ の隠在は /a/ の直後において起こりはじめ、それが他の環境にも波及したのではないかという考えである。たとえば、nar-「なる」のとりたて否定形として、次の(5)のように naRseN という形が存在する⁽³⁾。この語形は、nar-aseN において /ra/ が隠在したものと考えられる。

- (5) moR sugu ame=ni naRseN=ka.
 もう すぐ 雨=DAT なる.NEG=Q
 「もうすぐ雨になるんじゃないか?」

他にも、ar-「ある」から aRseN (< ar-aseN)、wakar-「わかる」から wakaRseN (< wakar-aseN) のように、/ara/ の /ra/ が隠在したと考えられる用例がある。この隠在が他の環境にも広がり、hur-aseN > huRseN、mir-aseN > miRseN のように、/ura/ や /ira/ という音列においても、/ra/ の隠在が起こるようになったと予想される。

以上のような /ra/ の隠在は、単に /ara/ という音列に対して規則的に起こったのではなく、-aseN という接辞に固有の現象であると考えられる。たとえば、単純否定形の場合も、nar-aN のように /ara/ という音列自体は現れるが、/ra/ が隠在して *naRN とはならない。つまり、nar-aseN は naRseN と交替するのに対して、nar-aN は *naRN とは交替しないのである。これは、/ra/ が隠在した後も、seN という音声的にも安定した形が保たれており、否定を表す接辞として意識されやすいためではないかと考えられる(この意識が次の(ウ)の成立につながったと考えられる)。一方、単純否定形 nar-aN の場合、音声的な安定性もあって、話者の意識としては na-raN と分析され(この意識がラ行五段化にもつながる)、raN が否定を表す接辞として認識されていると思われる。そのため、/ra/ が隠在して *naRN となると、否定を表す raN の形が保たれなくなるため、/ra/ の隠在は起こらない。上で指摘した、単純否定形 mir-aN が *miRN という形にはならないことも、raN を保つという観点から同様に説明できる。

以上、表1における(イ)の語形が、/r/ で終わる語幹に -aseN が接続した際に /ra/ が隠在した結果成立したものと考えられることを述べた。その背景には、seN が否定を表す接辞として話者に意識されやすく、その直前で隠在が起こりやすくなったことにより、/a/ の直後以外の環境においても hur-aseN > huRseN のように隠在できるようになったのだと考えられる⁽⁴⁾。このような seN に対する意識が強まったことが、次の(ウ)につながる。

4.3. (ウ) 再分析された -seN

前節で述べたとおり、r-aseN において /ra/ の隠在が起こった背景には、seN がとりたて否定形の接辞として意識されたことが関わっている。この -seN がそのまま再分析され、mi-seN のような形で母音語幹に接続したのが、(ウ)の語形である。-seN が再分析される背景として考えられるのは、miraN のような、ラ行五段化した単純否定形との対が話者に意識されたことである。つまり、ラ行五段化によって誕生した miraN が mi-raN と再分析され、-raN と同

じスロットに -seN が入ったというわけである。

このことは、「来る」と「する」の語形からもうかがえる。「来る」は ko-seN、「する」は se-seN という形をとるが、このときの ko-、se- という語幹は、単純否定形のときと同じ形である。つまり、語形によって語幹の母音が入れ替わる「来る」と「する」において、否定形を作る際の語幹に -seN を後接させていることがうかがえる。

4.4. 本節のまとめ

以上、平田方言のとりたて否定形の形態を、迂言的な形式 V=wa se-N からの変化の過程の中に位置づけて整理した。その結果、迂言的な形式が、縮約・平準化・隠在・再分析といったプロセスを経て様々な語形に派生したことが明らかになった。4.1節で少し言及したが、このような平田方言とりたて否定形の形態は、出雲方言内部で見てもかなり文法化が進んだ段階にあるといえる。ただし、詳細な地域差や個人差などは本稿では扱えないため、別稿に譲る。

5. 平叙文におけるとりたて否定の意味

次に、平田方言のとりたて否定形が表す意味について記述する。平田方言においては、平叙文と疑問文とで、とりたて否定形が表す意味が異なるため、本節では平叙文、次の6節では疑問文について記述する。

2.1節でも述べたように、「しはしない」に由来するとりたて否定形が表す意味は、方言によって差があることが先行研究によって明らかにされている。特に、工藤(1992)や竹内(2013)ではとりたて否定形が単純否定形とどのように意味が異なるかを詳細に記述しているため、本節では、これらの記述を援用して、平田方言のとりたて否定形の意味について記述する。

竹内(2013)は、岡山方言のとりたて否定形「(り)ゃーせん」を使用するには、以下の(6)に示す2つの条件を満たす必要があると述べている。

- (6) a. 既存の情報と新規の情報の双方が関わっていること。
 b. 既存の情報と新規の情報が矛盾した関係にあること。 (竹内 2013:9)

これは、工藤(1992)が以下の(7)のように記述している宇和島方言のとりたて否定形が表す意味とおおむね同じ線で考えられる。

- (7) 1. 〈事態成立(肯定性)〉への〈他者(2,3人称者)の確信〉に対する〈話し手(1人称者)の否認〉
 2. 〈事態成立(肯定性)〉への〈期待の不成立〉に対する〈話し手の不本意性〉
 (工藤 1992:132)

(7)の1に述べられている内容を竹内(2013)が「使用の条件」としてまとめおしたのが(6)であるといえる。すなわち、宇和島方言と岡山方言において、とりたて否定形が用いら

れるのは、発話時に既に聞き手の見込みが存在し、それを否定(工藤の用語では〈否認〉)するような場面であるとまとめることができる。以下、主に宇和島方言と対照させつつ、平田方言のとりたて否定形がこれらの条件を満たすかどうか検討する。

まず、〈否認〉の中心的な性質について検討する。宇和島方言では、次の(8)ではとりたて否定形が使えるが、(9)では使えない。

- (8) A: 明日お客さんが来るんで。
 B: 嘘よ。{コン/クラヘン} で。
 (9) A: 明日はお客さんが来んでなあ。
 B: そうよ。{コン/*クラヘン} ぜ。

(以上、工藤 1992:132より、宇和島方言の例)

(8)では、Aが「(お客さんが)来る」という見込みを持っており、その見込みをBが否定している。このような場面において、とりたて否定形であるクラヘンが使用されている。一方、(9)では、Aが「(お客さんが)来ない」という見込みを持っており、Bはそれに同意して「そうよ」と返答している。この場合、単純否定形のコンは使用できるが、とりたて否定形のクラヘンは使用できない。他者が持っている見込みを否認する場面ではないからである。

一方、平田方言では、以下のようにどちらの場面でもとりたて否定形が使える。

- (10) A: asita=no kai=ni taroR=wa kuR=dara=ga.
 明日=GEN 会=ALL 太郎=TOP 来る.NPST=INFR=SFP
 「明日の会に太郎は来るだろ？」
 B: ija {ko-N=zi / kuRseN=zi}.
 いや {来る -NEG=SFP / 来る.NEG=SFP}
 「いや、来ないよ」
 (11) A: asita=no kai=ni taroR=wa kor-aN=ga=noR.
 明日=GEN 会=ALL 太郎=TOP 来る -NEG=SFP=SFP
 「明日の会に太郎は来ないよね」
 B: uN ko-seN=zi.
 うん 来る -NEG=SFP
 「うん、来ないよ」

(10)は「(太郎が)来る」というAの見込みをBが否認して「来ない」と発話する場面で、(11)は「(太郎が)来ない」というAの見込みにBが同意して「来ない」と発話する場面である。宇和島方言では(11)のような場面((9)と同じ)でとりたて否定形が使えないが、平田方言では上記のようにどちらの場面でもとりたて否定形を用いることができる。

さらに、工藤(1992)によると、宇和島方言におけるとりたて否定形による否定文では、他

者の見込みに対する態度および話し手の事態不成立性が「確信的」である必要があるという。たとえば、次の(12)の宇和島方言の例を見られたい。

- (12) A: 明日誰か来る↑
 B: {コン/*クラヘン} ぜ。(工藤 1992:131)

(12)では、Aが「明日誰か来るか」と質問しているが、この際、その答えに対する見込みはAの中にはない。つまり、単に来るかどうかわからないから聞いているだけである。このような場面では、とりたて否定形クラヘンが使えない。Bが否認する対象であるAの見込みがないからである。一方、平田方言では、(13)のような場面でもとりたて否定形が使用できる。

- (13) A: asita=no kai=ni taroR=wa ki-te=ka=ja.⁽⁵⁾
 明日=GEN 会=ALL 太郎=TOP 来る -SEQ=Q=SFP
 「明日の会に太郎は来られる？」
 B: iNja ko-seN=zi.
 いや 来る -NEG=SFP
 「いや、来ないよ」

同様に、宇和島方言のとりたて否定形は、話し手が事態不成立性に確信をもっていなければ使えないため、以下のように「ひよっとしたら」のような不確かさを表す表現とは共起しない。

- (14) A: 明日お客さん来るんで
 B: いやー、ひよっとしたら {コン/*クラヘン} ぜ。(工藤 1992:131)

一方、平田方言では、次のように、とりたて否定形が「確か」と共起可能である。

- (15) A: asita=no kai taroR kuR=ka=ja.
 明日=GEN 会 太郎 来る.NPST=Q=SFP
 「明日の会に太郎は来るの？」
 B: iNja tasika ko-seN=zi.
 いや 確か 来る -NEG=SFP
 「いや、確か来ないよ」

以上のことから、平田方言のとりたて否定形は、宇和島方言や岡山方言と違って「事態成立に対する他者の見込みを強く否認する」という意味に制限されていないことがわかる。つまり、平田方言のとりたて否定形は、竹内(2013)のいうCタイプ、すなわち関西方言の「ヘン」と

同じ意味を表すことができる。

- (19) moR sugu ame=ga huR=da ne=ka.
 もう すぐ 雨=NOM 降る.NPST=COP ない.NPST=Q
 「もうすぐ雨が降るんじゃないか」

この=da は名詞述語文で用いられるコピュラだが、平田方言ではコピュラが用言にも後接することができるため、上の=da ne=ka は「のではないか」に相当することになる。

工藤(1992)によると、宇和島方言のとりたて否定形にも同様の用法があり、以下のように疑問文で用いられるという。

- (20) A：ナイターまだハジマラン↑
 B：うん、まだハジマラン。
 (21) A：ナイターもうハジマラヘン↑
 B：ううん、まだハジマラヘン。 (以上、工藤 1992:127)

(20) では A が単純否定形のハジマランを上昇調で用いて、「まだ始まらないのか」と尋ねているのに対して、B が「まだ始まらない」と単純否定形で返答している。この A の発話は、ナイターがまだ始まっていない現状を踏まえたものであり、否定の傾きを持った否定疑問文である。一方、(21) の A はとりたて否定形ハジマラヘンを疑問文で用いることにより、「もうすぐ始まる」見込みを持っている。そのため、「まだ」ではなく「もう」が共起しているし、「始まらない」と答える B の返答も「うん」ではなく「ううん」となっている。このときの A の発話は「もう始まるんじゃないか」と訳すのが適切であり⁽⁷⁾、平田方言の例と同様である。すなわち、平叙文においては、平田方言と宇和島方言とでとりたて否定形の意味に違いがみられたが、疑問文においては、おおむね同じ意味で用いられていることがわかる。

しかし、疑問文においても、両方言で異なる点がある。それは、とりたて否定形とテンスの関係である。工藤(1992:124)は、「スラヘン形は、過去のことであっても、非過去形の使用が常に可能であるし、むしろ非過去形を使用する方が多いと思われる」と指摘し⁽⁸⁾、以下の(22)のような例を挙げている。

- (22) A：あんた、この間わたしの本 {モッテイカヘン／モッテイカヘナンダ} ↑
 B：{モッテイカヘン／モッテイカヘナンダ} ぜ。
 (工藤 1992:124-125)

(22) において、A が言及しているのは、「この間」とあるように、過去のできごとである。そのできごとについて、とりたて否定形で尋ねることで、「持って行ったんじゃない？」と B に持ちかけている場面である。このとき、とりたて否定の過去形モッテイカヘナンダも使えるが、

非過去形のモッテイカヘンも使えるという。

一方、平田方言ではこれが不可能である。すなわち、疑問文において、とりたて否定の非過去形によって過去のことを表すことはできない。それどころか、とりたて否定の過去形であっても、過去のことについて言及することはできない。たとえば、次の(23)では、述語が kuRsedaQta=ka となっているが、これは「来たんじゃないか」ではなく「来なかったか」の意味である⁽⁹⁾。このような場合に「来たんじゃないか」の意味を表すには、(24)のように過去形に=da ne=ka を後接させる必要がある。

- (23) aicu kuRsedaQta=ka=ne.
あいつ 来る.NEG.PST=Q=SFP
「あいつ、来なかったか？」
- (24) aicu ki-ta=da ne=ka.
あいつ 来る -PST=COP ない.NPST=Q
「あいつ、来たんじゃないか」

次の(25)も同様に、「誰かが落としたんじゃないか」という話し手の見込みを表すために、とりたて否定形は使えない。

- (25) *kora dare=ka otos-jasedaQta=ka.
これ.TOP 誰=Q 落とす -NEG.PST=Q
(財布が落ちているのを見つけて)「これは誰かが落としたんじゃないか」

以上のように、平田方言のとりたて否定形は、疑問文で用いることで、話し手の推定を表すことができるが、それは非過去の事態に限られる。同様に、否定の見込みを表すこともできない。

7. まとめ

本稿では、島根県出雲市平田方言におけるとりたて否定形の形式と意味について記述した。そして、以下のことを明らかにした。

- a. 平田方言のとりたて否定形の形態には複数の種類がある。これらは、「～しはせん」に相当する迂言的な形式 V=wa se-N からの変化の過程に位置づけて整理することができる。すなわち、(ア)縮約と仮定形への平準化を経た形式 (mir-(j)aseN)、(イ)/ra/ の隠在を経た形式 (miRseN)、(ウ)-seN として再分析された形式 (mi-seN) の3種類である。(4節)
- b. 平叙文におけるとりたて否定の意味は、先行研究で指摘されているような「相手の肯定的な見込みに対する否認」に制限されることはなく、単純否定形とほぼ同じ意味で使うことができる。(5節)

- c. 疑問文で用いられるとりたて否定形は、話し手の見込みを表す「のではないか」とおおむね同じ用法を持つが、非過去かつ肯定の場合に限られる。(6節)

本稿は、1人の話者の体系をできるだけ詳細に記述したものであり、出雲方言内部の地域差や年齢差などを明らかにする定量的な調査や、「とりたて否定形の単純否定化」への位置づけが十分にできなかった。本稿を踏まえて、それらの課題に取り組む必要がある。

注

- (1) とりたて否定形の様々な形態を整理することを本節の主な目的とするため、表1には非過去形のみを示す。とりたて否定形の過去形は、次のように、-(j) asedaQtaのような形をとる。
- (あ) kinoR=no kai=de aicu sake nom-asedaQta=ga.
 昨日=GEN 会=LOC あいつ 酒 飲む -NEG.PST=SFP
 「昨日の会で、あいつは酒を飲まなかったよ」
- (2) 小西(2011, 2017)が指摘するように、ラ行五段化の進行度合いは、出雲方言の中でも地域差があるが、その中でも平田はラ行五段化が進んでいる地域に含まれる。
- (3) 例文(5)は、とりたて否定形が疑問文で用いられている例であり、6節で述べるように話し手の推定を表す用法である。
- (4) ただし、表1において、「来る」のとりたて否定形としてkuRseNが用いられる一方で、kur-aseNに対する話者の判断がゆれることについては説明がつかない。可能性として考えられるのは、4.1節や4.3節で言及しているように、「来る」の否定形を作る語幹には、/o/が含まれる形が好まれる傾向があるというものである。とはいえ、それでもkuRseNが用いられることの説明はできない。
- (5) このki-teという形式は、ku-「来る」の中止形だが、平田方言では、この形がいわゆるテ敬語として機能する。
- (6) 実際にゴキブリを退治している最中にこの文が発せられた場合、「一回的事態を表す」例ともとれる。しかし、ここでは「ゴキブリ」が=waで主題としてとりたてられていることから、ゴキブリ一般に対する恒常的な事態(性質)に言及していると考えられる。
- (7) 工藤(2014:410)では同様の例が「んじゃないか」で訳されている。
- (8) 工藤(2014:236-237)では、以下の(い)のように、標準語でも〈否認〉の場合には過去のことを非過去形で表すことが可能だと指摘している。
- (い)「どうしたの、高原さんとケンカでもした？」
 「しませんよ。ただ、罪もない人に怒っちゃったから、気が滅入っているだけ」
- (9) 標準語において、「来たんじゃないか」と「来なかったか」は似ているが異なる。その違いは、安達(1999)に詳しい。

略号一覧

-: 接辞境界 / =: 接語境界 / ALL: 向格 / COP: コピュラ / DAT: 与格 / GEN: 属格 / INFR: 推量 / LOC: 所格 / NEG: 否定 / NOM: 主格 / NPST: 非過去 / PST: 過去 / Q: 疑問 / SEQ: 中止 / SFP: 終助詞 / TOP: 提題

付記

本稿の内容は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」「消滅危機言語の保存研究」およびJSPS 科研費21K13015、20H00015、22K00598による研究成果の一部である。

参考文献

- 安達太郎 (1999) 『日本語疑問文における判断の諸相』 くろしお出版.
- 工藤真由美 (1992) 「宇和島方言の2つの否定形式」『国文学 解釈と鑑賞』 57-7, pp.134-120 (左開き), 至文堂.
- 工藤真由美 (2014) 『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』 ひつじ書房.
- 国立国語研究所 (編) (1999) 『方言文法全国地図第4集』 財務省印刷局.
- 小西いずみ (2011) 「出雲方言における「一段動詞のラ行五段化」に関する覚書」『論叢国語教育学』 7, pp.49-60, 広島大学大学院国語文化教育学研究室.
- 小西いずみ (2017) 「中国地方における一段動詞の五段動詞化—活用体系の平準化における停滞・阻害の事例として—」大西拓一郎 (編) 『空間と時間の中の方言—ことばの変化は方言地図にどう現れるか—』 pp.162-175, 朝倉書店.
- 下地理則 (2020) 「方言研究における例文提示法について」日本方言研究会 (編) 『方言の研究6』 pp.119-141, ひつじ書房.
- 竹内史郎 (2013) 「取り立て否定形式の文法化—岡山方言と関西方言を対照して—」『日本語文法』 13-1, pp.3-19, 日本語文法学会.
- 田野村忠温 (1988) 「否定疑問文小考」『国語学』 152, pp.16-30, 国語学会.
- 丹羽一彌 (2002) 「否定形式とセンについて」『人文科学論集 文化コミュニケーション学科編』 36, pp.13-24, 信州大学人文学部.
- 野間純平・友定賢治 (2022) 「島根県出雲市平田」セリック, ケナン・木部暢子・五十嵐陽介・青井隼人・大島一 (編) 『日本の消滅危機言語・方言の文法記述』 pp.215-266, 国立国語研究所.
- 間健介 (2006) 「島根・鳥取県境周辺に見られる新方言「～へん」」『高知大國文』 37, pp.11-37 (左開き), 高知大学国語国文学会.
- 日高水穂 (2007) 「文法化理論から見る『方言文法全国地図』—「とりたて否定形」の地理的分布をめぐって—」『日本語学』 26-11, pp.92-100, 明治書院.
- 平子達也・小西いずみ (2022) 「島根県雲南市木次町」セリック, ケナン・木部暢子・五十嵐陽介・青井隼人・大島一 (編) 『日本の消滅危機言語・方言の文法記述』 pp.151-213, 国立国語研究所.
- 平子達也・友定賢治 (2018) 「要地方言の活用体系記述 島根県出雲市平田方言」方言文法研究会 (編) 『全国方言文法辞典資料集(4) 活用体系(3)』 pp.77-86, 科研費研究成果報告書.
- 廣戸惇 (1949) 『山陰方言の語法—出雲・隠岐・石見・伯耆—』 島根新聞社.
- 廣戸惇 (1950) 『山陰方言の研究』 島根県立教育研修所.
- 藤木敦 (1959) 「出雲方言における[r]音について」『方言研究年報』 2, 広島方言研究所 (再録: 井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎 (編) 1997 『日本列島方言叢書19 中国方言考2』 pp.31-44, ゆまに書房)
- 室山敏昭 (1964) 「鳥取県伯耆西部方言におけるラ行音節の隠在現象」『国文学攷』 33, pp.24-34, 広島大学国語国文学会.

Another Negative in Izumo-Hirata Dialect

NOMA Jumpei

(Faculty of Law and Literature, Shimane University)

[Abstract]

Spoken in the Izumo area of Shimane prefecture, Hirata dialect has two negative forms of verb, simple (e.g., *kak-aN*) and another (e.g., *kak-jaseN*) negative. This study examines the latter, which originates from the periphrastic expression “*V=wa se-N*.” Another negative has some variants (e.g., *mir-aseN*, *miRseN*, and *mi-seN*) through some processes, the analogical leveling with conditionals, r-deletion, and reanalysis. In declarative sentences, another negative has roughly the same meaning as a simple negative, while in some other dialects (e.g., Uwajima, Okayama, and Aich), it is used only when it represents denial of the presupposition. In interrogative sentences, another negative is used as epistemic modality, which corresponds to *nodewanaika* in Standard Japanese, although only when it is unmarked in tense and polarity.

Keywords: Izumo dialect, negation, *toritate* negative (another negative), grammaticalization, *nodewanaika*